

# 能・狂言とは、「和製ミュージカル」です。

## 能

五穀豊穡を祈る芸能を源流とし、室町時代から600年以上上演されてきた日本を代表する舞台芸術です。江戸時代までは猿楽と呼ばれ、狂言とともに「能楽」と総称されるようになったのは明治以降のことです。



### 室町時代に世阿弥が大成

能の起源は定かではありませんが、大陸から渡ってきた「散楽」や、五穀豊穡を祈る民俗芸能などが元となって発展、「猿楽」と呼ばれるようになりました。狂言も猿楽から発展した芸能です。650年ほど前の室町時代に観阿弥が曲舞の節などを取り入れて音楽面でも発展させ、猿楽を改革しました。その息子の世阿弥は父の偉業を受け継ぎ、今日まで続く能の様式を確立しました。世阿弥は、父が目指した「幽玄」を理想とする芸能を、一層優美な舞台芸術へと高めたのです。主役を勤める「シテ」を中心に進む演出は、多くの名曲を誕生させました。世阿弥は『風姿花伝』などの著作も残しましたが、私たちがよく知っている「初心忘るべからず」「秘すれば花」なども、その中の言葉です。江戸時代には徳川幕府の



「1300年祭」で使用する本格的な能舞台。(兵庫県園芸・公園協会所有)



新作能「針間」で地謡を務める観世鏡之丞氏(左から2人目)。3月16日東京・国立能楽堂で。



新作能「針間」における国司・小橋。演じるのは人間国宝・梅若玄祥氏。3月16日東京・国立能楽堂で。

### 聴いて、観て、楽しむ

「式楽」となり、脈々と日本の美学を伝えてきた能楽は海外からも高い評価を得、ユネスコ無形文化遺産に指定されました。能の音楽は謡と囃子で成り立っています。主役のシテや、シテの相手役であるワキなどによる一人称の謡(台詞や歌)で舞台は進行しますが、これとは別に合唱パートを受け持つのが地謡。新作能『針間』では、観世鏡之丞氏がリーダー役です。大鼓、小鼓などの囃子方の中で、唯一メロディを奏でるのは笛。藤田六郎兵衛氏の名演奏をお楽しみ下さい。また、「面」や「装束」も能の楽しみの一つです。多くの場合、面をつけるのはシテで、神や精霊など人間以外の存在であることを示しています。美しい装束に彩られた仮面劇「能」は、聴いても観ても楽しめる奥深い魅力に満ちています。



新作能「針間」における兄のおけ王(後の仁賢天皇)。演じるのは大槻文蔵氏。3月16日東京・国立能楽堂で。

**新作能「針間」のあらすじ**  
2人の皇子・意(い)と袁(えん)の父・市(いち)押(お)磐(い)皇子(みこ)が、皇位継承争いから近江国で殺されました。2人の皇子は日下部連に導かれ、志深村の岩室に隠れますが、志深村首・伊等尾の家で牛飼いの下男として仕えることになりました。数年が経ったある日、伊等尾が催す新築祝いの宴で歌を所望された弟の袁(えん)は、歌い舞いながら、ついにその歌詞で自らの正体を明かします。国司の小橋はこれを都に報告。2人の皇子は、都に迎えられ天皇となったのです。

## 狂言

主役のほとんどが室町時代の庶民で、人間讃歌に満ちたヒューマンコメディとも言えます。能とともに歩んだ長い歴史の中で洗練され、「笑いの芸術」として、現在も親しまれています。

### 能とセットで演じられた狂言

狂言は能と同じく、猿楽を源流とする芸能で、室町時代から能とセットで演じられてきました。能と大きく違うのは、能ではほとんど表現されない「笑い」。狂言は、日常的な事柄や階級社会の矛盾を、洗練された笑いの中に表現するセリフ劇。そもそも猿楽は「滑稽」が特徴でしたから、狂言はその流れを受け継いだといえるでしょう。狂言には能との間の小劇として演じられる「本狂言」と、能一曲の中間で演じられる「間狂言」があります。単に狂言と呼ぶときは、本狂言のことです。もともと「狂言」とは、中国の言葉で「道理に合わない」「冗談」といった意味で使われていました。万葉集では「たわごと」と読まれています。それがやがて、「滑稽」という意味と同じように使われるようになったのです。



狂言の代表的な主人公は、室町時代の庶民の象徴である太郎冠者(写真は野村萬斎氏)や次郎冠者。

### 主人公は室町時代の庶民

能では「候」という言葉が使われますが、狂言は「ござる」という室町時代の庶民の言葉がベースになっています。そのおらかなセリフによる対話と語り、写実的でおおげさな感じが特徴的です。かつて狂言は、滑稽な所作や洒落などの言葉遊びを主体とする即興芸でしたが、その笑いの奥には悲哀や怒りなどさまざまな庶民感情が秘められており、強烈な風刺が表現されます。けれども、いつもその底に流れるのは、おおらかな人間讃歌です。現在、



撮影:吉川信之



撮影:吉川信之

狂言だけを演じる「狂言の会」も多く開かれ、能舞台だけではなく、市民ホールなど多様な場で上演されて、人気が高まっています。新作狂言「根日女」では、野村萬斎氏が播磨国の賀毛の里(兵庫県加西市)の国造・許麻(こま)を演じ、根日女や天女、雷神、風、若武者を「加西市こども狂言塾」の塾生たちが演じます。



新作狂言「根日女」の稽古に励む「加西市こども狂言塾」の塾生たち。

**新作狂言「根日女」のあらすじ**  
2人の皇子・意(い)と袁(えん)が身分を隠して志深村にいる頃、2人の皇子は、国造・許麻の娘である根日女に求婚しますが、譲り合ったため話はずれのまま、結ばれることなく根日女は亡くなってしまいました。2人の皇子は大いに悲しみ、「朝夕、日の光がさす地に墓を作り、輝く玉で墓を飾るよう」と指示しました。現在も大蔵神の地、加西市に残る玉丘古墳(前方後円墳)。そこに伝わる根日女の物語を、野村萬斎氏が新作狂言に監修。オーディションで選ばれた、加西市こども狂言塾の27人の子どもたちが、萬斎氏や狂言師の皆さんと上演します。